



〔監修〕

小松左京／紀田順

海野

江蘇工業學院圖書館

二藏書章

全集

魔城



三一書房

海野十三全集

第6巻 太平洋魔城 (第6回配本)

1989年9月15日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

監修者	小松左京 紀田順一郎
発行者	畠山滋
印刷所	日本写真印刷株式会社
製本所	東京美術紙工
発行所	株式会社 三一書房

東京都文京区本郷2-11-3
電話 03 (812) 3131~5 番
振替東京9-84160 番
郵便番号 113

落丁・落丁本はおとりかいたします
ISBN4-380-89540-8

© 1989年

太平洋魔城・目次

宇宙女囚じよしゆう第一号 5

空気男 15

怪塔王 23

人造人間じんぞうにんげんエフ氏 229

空中漂流くうちゅうひょうりゆう一週間 293

第四次元の男 315

地底戦車ちていせんしゃの怪人かいじん 327

太平洋魔城^{まじょう}

395

解題〔瀨名堯彦〕

507

太平洋魔城——海野十三全集·第6卷——

宇宙女囚じょしゅう第一号

イー・ペー・エル研究所に絵里子^{えりこ}をたずねた僕は、ついに彼女に会うことができず、そのかわり普段はろくに口をきいたこともない研究所長マカオ博士に手をとられんばかりにして、その室に招じられたものである。この思いがけない博士の待遇に、僕は面喰ったばかりか、なんだか変な気持ちさえ生じた。

「おうほ、絵里子はね——」

おうほと、博士独得の妙な感歎詞をなげること、博士の願髯^{もひげ}がごそりとうごいた。

「おうほ、絵里子はね、女性にはめずらしい学究だ。君と絵里子とは結婚する約束があるそうだが、君は世界一の令夫人を迎えるわけで、世界一の名譽を得るわけだ。しかしねえ——」

といって博士はちよつと小首をかしげ、

「しかしねえ、絵里子を妻にした君が、家庭的にはたして幸福者といえるかどうかはわからないよ。第一儂^{わし}はいつもこう考えている。絵里子の科学的天才を区々たる家庭的の仕事——コーヒーを入れたり、ベッドのシーツを敷きなおしたり、それからまた馬鈴薯^{ばれいしょ}の皮をむいたりするようなことで曇らせるのは、世界の学術のためにたいへんな損失である——」

「まあ待ってください、マカオ博士」

と僕は、胸を下からつきあげてくる憤りを一生懸命^{こゝろ}怍

えながら叫んだ。

「博士、すると貴方は、僕たちの結婚に反対されるわけなのですか」

博士は、ごそりと願髯をうごかし、

「おうほ、なにも儂は君がたの結婚に反対とはいっていい。しかしだ、君がたは自発的に天の理にしたがうのが賢明じゃろうというものだ」

博士は僕たちが結婚することを非常に忌みきらっているものと思われる。僕は、非常に不満だ。

「まあ、そう唇をふるわせんでもいい。いや君の不満なのはよう分っている。しかしじゃ、科学というものは君が考えているより、もつと重大なものだ。時には、結婚とか家庭生活とかよりも重大なものだ。——そう、儂をこわい目で睨^{にら}むな。よくわかつているよ、君は儂の説に反対だというんだらう。ところがそれは儂の目から見ると君が若いというか、君がまだ多くを知らないというか、それから発したことだ」

「マカオ博士——」

「こら待たんか。その大きな拳で、儂の頤をつきあげようというのだらう。そして儂の頸をぎゅーっと締めつけようというのだらう。それくらいのことにはわかつているぞ。だが待て、ちよつと待ってください。儂が君に殴り殺される前に、ぜひ君に見せてやりたいものがある」

博士は、まだ頸をしめられてもいないのに、くるしうにあえぎあえぎ云う。

「僕に見せるって、一体それは何を見せるというのですか」

僕はさすがに気になった。絵里子に関係のあることではないかと、すぐそのように思ったのであった。

博士は僕を制して、自分のあとについてくるようにと合図をおくった。

博士の後に従って、僕は小暗い長廊下をずんずん奥へあるいていった。

そのうちに博士は、廊下の途中から横についている急な階段をのぼりはじめた。

（おお、これはマカオ博士の秘密研究塔に通じる階段だ）

と、僕はひそかに胸をおどらせた。

博士は僕を秘密研究塔につれこんで、一体なにを見せるつもりなんだらう。

この研究塔は、往来からもよく見えた。研究所のまわりは部厚い背の高い壁にとりまかれ、その境内は鬱蒼たる森林でおおわれていた。そしてところどころに、研究所の古風な赤煉瓦の建物が頭を出していたが、それとはまた別に一棟、すばらしく背の高い白堊（はくわ）ぶくりの塔が天空を摩して聳えていた。それは遠くから見ると、まるで

白い編上靴を草の上に置いてあるように見えた。螺旋階段の明りとりらしい円窓がいくつも同じ形をして、上から下へとつづいていた。それはまるで八つ目鰻の腮（はら）のように見えたが、その窓枠はよく見ると臙脂色に塗ってあった。

博士は、螺旋階段をことごとと、先にたつてのぼっていった。僕は、黙々としてその後につきしたがったが、階段を一つのぼることに、僕の心臓はまた一段と昂く動脈（みやく）をうつのであった。

「さあ、しばらく入口で待っていてくれたまえ」

博士は、塔の頂上を占めている大実験室の扉の前に立停ると、僕の方をふりかえってそういった。そして自分は、入口の暗号錠をしきりにがちゃがちゃやっていたが、やがてそれをがちゃりと開いて、ひとり室内に姿を消した。

僕は入口に佇（た）みながら、異常な好奇心でもって室内の様子をうかがった。なにかしら、ひゅーんという高い唸り音をあげて、廻転機がまわっていた。

ことと、ことと、ことと。

カムがしきりにピッチをきざんでいる。

ぴかり——と、紫色の電光が、扉の間から閃いた。じいじいじいじいと、放電のような音もきこえる。

それにひきかえ、マカオ博士はなにをしているのか、

咳の声さえ聞えてこない。

僕の心臓は、なんだか急に氷のように冷たくなったのを感じた。

ごとごとごとごと。

そのとき博士の姿が入口にぬつと現れた。

「さあ、おはいり。だが始めから断っておくよ。どんなものを見ても、気絶なんかしちゃいけないぜ」

僕は大きくうなずいて、そんなことは平気ですと博士に合図したが、内心では恟々としていた。これはなにかよほど意外なものが、この室内にあるらしい。一体なのであるう。僕はおずおずと室内に足をふみいれた。

「いいかね。こっちの小さい室に入っているんだ。檻があればいいのだが、生憎そんなものはない。まさかこんな怪物がとびこもうとは、想像だにしなかったのですね」
そういつて博士は、室内の一隅にある小さい扉を指した。

（怪物？ 怪物って、なんだろう）

博士は額に手をあげて、しばらく沈思してから、

「おい君。これから君が見る怪物は、一体何者であるか、当ててみたまえ。もし当てることができれば、この研究所をそっくり君にあげてもいいよ。つまり、いくら君が考えてもわけの分らない生物が、この小さい室に入っているんだ」

「僕は当ててみますよ。なに、人間の頭脳で考えられることなら、僕にだって——」

「いや、そうはいうが、こればかりは、人間の想像力を超越している。地球が出来て以来、こういう生物を見たのは僕が最初、絵里子が二番目、そして三番目が君だ」

ああ絵里子！

僕はひそかにこう考えていた。ひょっとして、僕は絵里子の死骸でも見せられるのではないかと考えていたのだ。博士が、実験の都合で、ふと彼女を殺害してしまいい、その死骸を僕に見せてなんとかいいわけをするのではあるまいかと。——しかしどうやらそれはちがっていいらしい。絵里子は、その怪物とやらを見たのち、今はなにをしているのだろうか。

「愕いてはいけない。さあ、ここに反射窓がある。これをのぞけば、この室内の様子ははっきりわかる」

博士は、普通、魔法鏡といわれる反射窓を指した。僕はすぐさま決心して、指さされるままに、その窓をのぞいてみた。

その中に見た刹那の光景！

ああ、これほど世の中に奇しき見世物があるであろうか。僕ははつと息をのんだまま、その場に硬直してしまつた。

おそろしい生物よ。

その別室の床に、大の字なりに死んだようになって寝そべっていたのは、最初の一目では、一個の裸形の女と見えた。

だが、次の瞬間、僕はそれを早速訂正しなければならなかった。

（女体らしい。しかしそれは絶対に人間ではない！）

絶対に人間ではあり得ないのだ。

なるほど四肢は豊満に発達し、皮膚の色はぬけるほど白く、乳房はゴム毬まきのようにもありあがり、金髪はゆたかに肩のあたりにもつれているところは女性人間のようにであるが、よく見ると顔がのつべら棒だ。そして頭髮の間から、三本の角が出ていて、その尖端にたしかに眼玉と思うようなものがついている。そいつはぐるぐるとうごめいていたが、おどろいたことに、眼瞼まぶたと思われるものがぱちぱちと眼をしばたいたのには愕おどろいた。こんな人間は絶対にあり得ない。

それから四肢だ。これをよく観察していると、腕はありながら、手首とか指などがない。その代り手首のあたりから先が、胡瓜の蔓きゅうりづつみのようにぐるぐると巻いていて、それがときどきぬーっと長く床の上にのびて、そこをしきりにのたうちまわる。

こんな形の生物は、人間の畸形例にも見たことがない。怪物というよりほか、呼び様がないであろう。

まだもう一つ気のついたことがある。

それは真白な肢体の膚に、点々として黒くて小さい斑点がついていることだ。そういうとそばかすみたいに聞えるが、そばかすではない。そばかすよりもずっとずっと小さい斑点で、そしていやに黒いのである。電送写真というものがあるが、あの写真を空電の多いときに受信すると、書面におびただしく小さな黒い空電斑点というものが印せられるが、どっちかというところ、その空電斑点によく似ているのであった。（後で分ったことであるが、その怪物の肢体についている黒斑が、僕の第一印象のとおり、やはり本当の空電斑点であると分ったときには、さすがの僕も腰がぬけたかと思ったほど愕おどろいた）

「あの怪物は、どうしたのですか。博士はどこからあれを持ってこられたのですか」

僕はマカオ博士の方をふりかえって、はげしく詰問の言葉をおくった。

「おうほ、そのことそのこと」

と、博士は手帛てうで額の汗をふきながら、「あれをなんというか、とにかくあの怪物が実験室の中の、なんにもない空間に足の方からむくむくと姿をあらわしはじめたときには、僕の総身の毛が一本一本逆立ち、背中に大きな氷の板を背負ったように、ぶるぶる顫ふるえがきて停めようがなかったものさ」

「え、なんですって」

と僕は思わず博士の言葉を聞きかえした。なんとという怪奇、僕にはちよつと了解に苦しむことだ。

「おうは、理解できないのも無理ではない。つまりもつと前から話をしなければ分らないだろう。なぜそういう怪物を、この実験室内に生ぜしめるようになったかということを——」

そういつて博士は、戸棚の上から、一束の青写真をおろし、卓子の上にひろげてみせた。

「これを見たまえ。これがこの室にある立体分解電子機と、もう一つ立体組成電子機の縮図だ。僕は十五年かかつて、この器械を発明し、そして実物をつくりあげたのだ」

「なんです、この立体分解とか立体組成とかいうのは」

「うん、そのことだ。この説明はなかなかむづかしい。

君はテレビジョンというものを知っているかね。あれは一つの写真面を、小さな素子に走査して、電流に直して送りだすのだ。それを受影する方では、まず受信した電流を増幅して、ブラウン管のフィラメントに加える。すると強い電流がきたときは、フィラメントは明るく輝き、沢山の熱電子を出すし、弱い電流がきたときは、フィラメントは暗く光って、熱電子は少ししか出てこない。この熱電子の進路を、ブラウン管の制御電極で

もつて、はじめと同じように走査してやると、電光板の上に、最初と同じような写真が現れる。これがテレビジョンの原理だ」

僕はなんのことだと思った。テレビジョンの原理などは、博士にきくまでもないことである。

「テレビジョンと、博士の御発明の立体分解電子機とは、どういう関係があるのですか」

「つまりそれは、一口にいうと、テレビジョンとか電送写真とかは、いまもいったとおり平面である写真を遠方に送るのであるが、僕の発明した電子機では、立体を送ったり、また受けたりするのさ」

「立体を送ったり受けたりといいますと——」

僕には何のことだか分らないので、問いかえした。

「つまり物体をだね、たとえばここに鉄の灰皿がある。これを電気的方法によつて遠方へおくったり、また遠方にあるアルミニウムの金盞を電気的方法によつてここへ持つてきたりするのさ。あつはつはつ、一向解せぬという顔つきだね。考えだけならなんでもないではないか。平面がテレビジョンや電送写真として送れるものなら、立体もまた送ったり受けたりできるわけではないか」

僕には、博士のいうことがすこしずつわかってきた。

「しかし博士、写真などはいと簡単ですが、鉄の灰皿な

どとなると、これは物質ではありませんか。電気になおすたつて、なおせますか」

「なあに訳のないことさ。鉄にしるアルミニウムにしる、これをだんだん小さくしてゆくと分子になり原子になり、それを更に小さくわつてゆくと電子とプロトンになる。ところがプロトンとは、電子のぬけ殻がらのことであつて、結局、この世の中には電子のほかにないものもないのさ。すべての物質は空間をいかに電子が構成しているかによつて、鉄ともなりアルミニウムともなるんだ。だからすべての物質は、最後においては電荷に帰することが出来る。そうではないか。平面であらうと立体であらうと、走査の原理には変りはない。平面走査ができれば立体走査もできるわけだ。鉄の灰皿を立体走査すれば、これすなわち一連の電信符号とかわりないものとなる。どうだ、分つたらうが」

「ふーむ、そういう理窟ですか。いや、おそろしいことになるものだ」

僕は長大息とともにそういった。

平面走査をする電送写真やテレビジョンがあれば、灰皿や金盥を立体走査することも案外似かよつた立体走査の原理でもつて達成し得られるように思う。

灰皿が出来れば、なにも金属にかぎらない。すべての物質物体は、電子に変じて送つたり受けとつたりできる

わけだ。すると、隣室の床にころがつている怪奇きわまるあの生物は——？

「あれも、博士の器械で吸いよせたのですか」

と、僕は氣もちのよくないことを、博士にきいてみた。

「うむ、やつと氣がついたようだね」と博士は頷うなづきをこそりとうごかし「君の察したとおり、あの怪物は、実は今月はじめて立体組成電子機をうごかしてみたところ、いきなり器械のはたらきでもつて、台の上に現れてきたんだ。いや、実に愕おどろいた。どの位愕おどろいたといつて、形容がでないほどだ。はじめはね、あのぬらぬらした触手というか触足というか、つまり人間でいえば足の方から現れてきたんだ。それまでにはなにもない空間にだよ、怪物の足が現れてきたんだ。器械がまわり、時間がたつにつれ、足の先に腰が現れ、それからその先に胴中やら、胸やら肩やら、そしてあの醜い首やらがむくむくと、まるで畳んであつたゴム風船を膨らますように現れてきたではないか。自分の発明した器械であるとはいへ、またそういうことが起ることも予想していたけれど、いよいよそういう風に実物が現れたときには、いかに氣丈夫な僕でも、ぞーっと身ぶるいした」

ものがたる博士の顔は、さすがに青ざめていた。

「博士、一体あの怪物は、どこにいたものが、こうして

ここへやってきたのでしょうか」

「多分、火星の生物だろうと思うよ。火星の生物も、いま僕がこしらえたと似たような器械をもっていて、それを使っているらしい。だから、火星において、たまたま走査をして電気になった女体を、僕の器械が吸いとってしまったわけらしい」

「おどろくべきことですね。そんなことが出来るとは、想像も及ばない」

と、僕は心の底から感嘆の詞を放った。

博士は、それほど得意そうに見えなかった。博士の眉毛の間にはふかい溝が刻まれていた。

「博士はこんな大発明をしながら、あまり喜んでいらっしやらないのは、どういうわけですか」

と、僕はつい気になって、たずねてみた。

「ああ、君の目にも、僕の苦痛が分るかね。そうだが、君の見るとおり、僕はまだ喜んでいないのだ。というのには、まだ分らないことが沢山あるのだ。たとえば、今君が見た宇宙女囚——と、仮に名づけておこう——あの宇宙女囚は、三つの眼をぴくりぴくりとうごかしている。つまりあの生物は、たしかに生きているのだ。しかし残念なことに、意識をうしなっている。宇宙を電気になつてとんでいるところを僕の器械に吸いよせ、そしてあのように立体化してみたところが、肉体は現れたが、

意識がないというのは、研究者としてこれが悲しまずにいられるだろうか」

博士はしんみりと述べた。

なるほど、あの怪物は生きてはいるが、意識がないようである。僕から見れば、博士は千古不朽の大発明をしたように思うが、当の博士としては、これではまだ研究を完成していないわけで、それで、はずかしいといっているであらう。

僕は博士に、宇宙女囚をもつと傍ちかくでみたいといったところ、博士はそれを承諾し、ついに小さい扉をひらき、宇宙女囚ののたうちまわる傍に、僕をつれていった。

反射鏡から見たときとはちがつて、傍ちかくによつてみた宇宙女囚の肢体といい容貌といい、あまりながく見ていると脳髓がきゅーつと縮まるのではないかといったような恐怖にさえ襲われるのであった。

そのとき僕は、ゆくりなくも、女囚の白い膚の上に、例の空電斑点をはつきりとみとめたのであった。この女体が一聯の電気と化して空間をはしりゆくとき、宇宙の雲助ともいふべき空電に禍わざわいされても不思議ではない。そして黒い斑点を身体中に印せられた結果、もとの立体にかえつても、この斑点はなにか意識の恢復を邪魔するようにはたらいっているのではなからうか。

僕がそのことを博士に話すと、博士は手をうつて喜んだ。

「そうだ。君の考えは、実にすばらしい。僕はそこまで考えつかなかったよ。うむ、分るぞ分るぞ。たとえば、脳髓の中にその黒い異物である斑点が交まじっていけば、脳髓の働きを害するにちがいない。——うむ、これはすばらしい発見だ。そういうことなら、なにも冒険をやつて、絵里子を宇宙に飛ばさないでもよかったのだ。ああもう時すでにおそしだ」

絵里子？

僕は博士の言葉を聞きとがめた。

「博士、くわしくいってください。絵里子をどうしたと
いうのですか。——博士、さあ教えてください。なぜ貴
方は黙っていられる——」

博士は僕の顔をしばし無言のままみつめていた。やが
て博士は慄おそえをおびた声で、

「絵里子は、いまごろ火星へついているだろう。僕は絵
里子に命じ、自分の研究力の足りないところを、火星へ
調査にやったのだ。絵里子は一連の電波となつて宇宙を
とんでいったよ。僕はあまりに成功を急ぎすぎた。それ
がよくなかったのだ。君にも絵里子にも済まないことを
した」

といって、僕の前に頭を垂れた。

